



基本姿勢を具現化するための3つの方針に基づくフレーム

新しいキャンパスでは、京都市立芸術大学の基本姿勢「芸術であること・大学であること・地域にあること」を設計を通して考え、発展させていく使命があると私たちは考えました。その使命を「**まちのようにつくり・成長する**」「**つくる・つかう・のこすを融合させる**」「**地域の生活とともにある**」という3つの方針に基づくフレームによって具現化します。

フレーム①

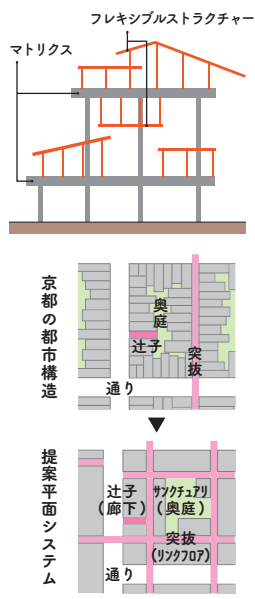
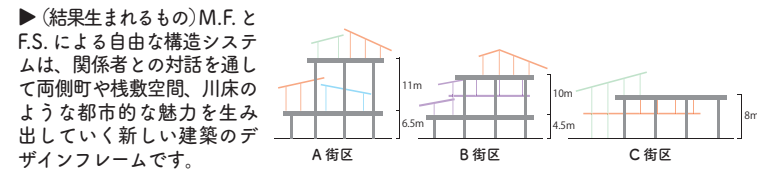
ひとつのまちが生まれ成長するように大学をつくる

①-1 マトリクスフロア (M.F.) とフレキシブルストラクチャー (F.S.)
条坊制を人々が住みこなすことにより多様で豊かな京都が生まれてきたように、**基盤となる M.F.と、柔軟な F.S.**というふたつの構造の仕組みを設定します。

※マトリクスフロア (MF) の柔軟性
M.F.の数と高さは各街区の特性に合わせて自由に設定できます。

①-2 活動の中心となる立体化した通り
京都の活動や文化が通りを中心に発展してきたことを引き継ぎ、**立体化した様々なスケールの道を大学活動の中心として位置付けます。**

①-3 奥庭による親密なサンクチュアリ
各棟に奥庭をもつことで、学内のサンクチュアリ空間を確保します。奥庭を介して部屋が向き合うことで、**科を超えた親密な出会いの場**になります。



フレーム②

「つくる」「つかう」「のこす」が融合したプロセス

②-1 活動の風景が現れる立面計画
研究室に占有されるバルコニー、各科を超えて大勢が行き交う共有廊下が、通りに向かってランダムに現れる計画とすることで、**キャンパスの活動風景がそのまま立面**となります。



②-2 対話のためのナレッジマネジメント (情報・知識の共有と活用)
「スケッチ・ランゲージ」や「巨大模型」、「インクルーシブデザイン」、「既存校舎でのシミュレーション」など、**視覚的・身体的・社会包摂的・空間的な独自の対話ツール**を開発します。言葉での共有ではこぼれ落ちてしまう大切なことも、より多くの使い手たちと共有できる新たなデザインの対話を提案します。

②-3 あらゆるアーカイブズが新たな地域資源となる仕組み構築
新たな住民として参画する大学・高校関係者が、柳原銀行記念資料館をはじめ地域で長きにわたって培われてきた「**自分たちのまちを自分たちでつくる**」自治の精神を引き継ぎ、新たなまちの地域資源を創出 / 蓄積できる仕組みを構築します。

フレーム③

地域の生活空間とともにある有機的なキャンパス

③-1 高瀬川沿いに展開するリサーチ・マネジメント (新機構) 軸
高瀬川 (旧河道含む) に沿ってギャラリーアクアや講堂、図書館、共通工房をはじめ、まちの古材循環センターや銭湯といった機能を展開し、**フォーマルな発表の場から地域との日常の交流の場までをひとつながりのもの**とします。

③-2 地域に編み込まれる7つの軸と5つの十字路
崇仁地区をはじめ、京都のまちに寄り添うキャンパスとして、「**暮らす・働く・創造する**」が一体となった計画を、全地区を横断する7つの軸、5つの十字路により体现します。



活動の中心となる通り

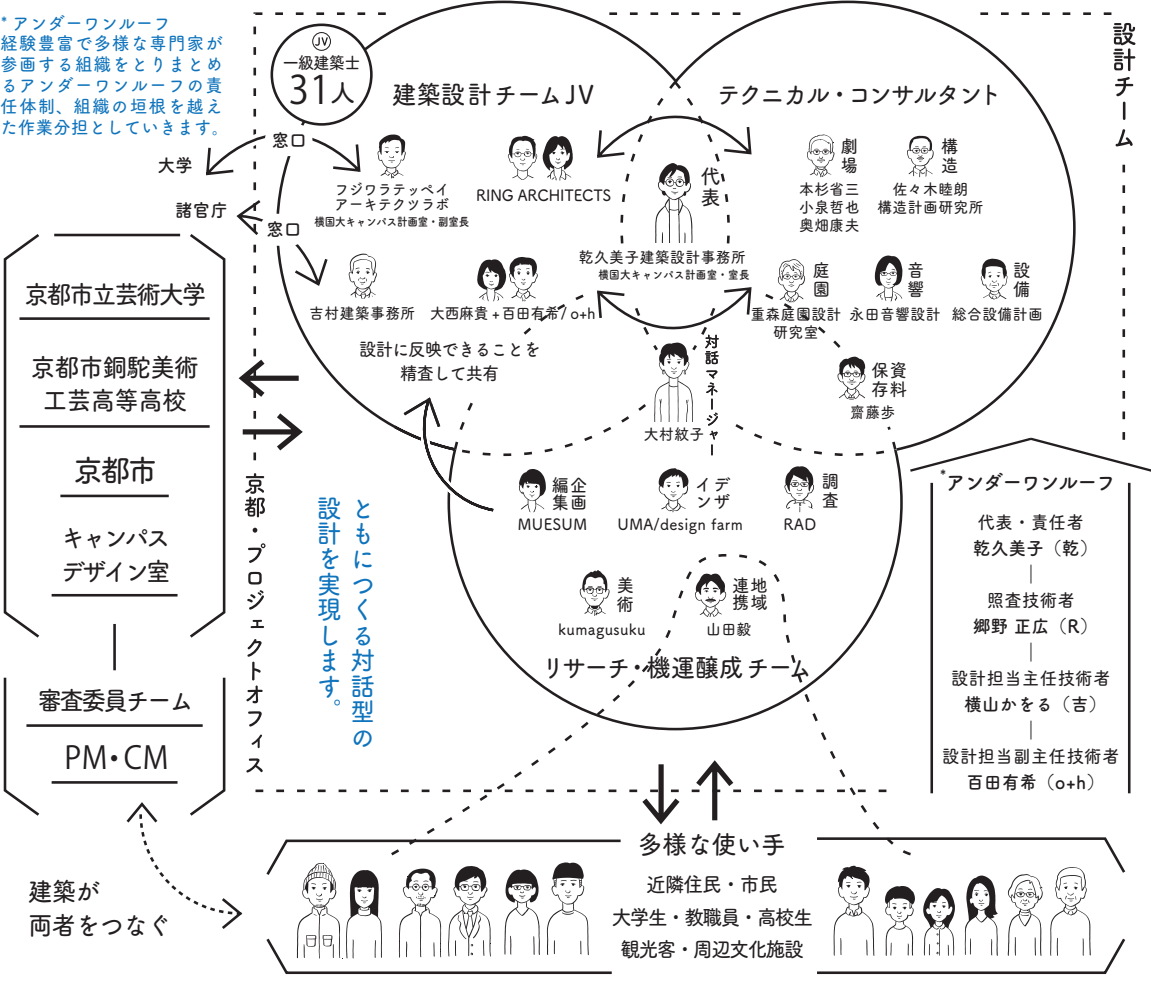


サンクチュアリとしての奥庭

水平的な対話から設計を実現していく実施体制を構築

設計チームの特徴

多様な対話プロセスを実現する、**確実性と柔軟性を兼ね備えた実施体制**を構築。在校生・OB、移転プレ事業にも参画する研究者が伴走し、**現在進行中のさまざまな移転プロジェクトと融合した設計プロセスを実現します。**



多様な使い手との協働



フィールドワーク



市民にプロセスを公開



地域マテリアルリサーチ



アンダーワンソールフな議論

ステージと客席を一体化させ、大学の講堂（ホール）として多様な利用形態、研究活動に対応できる可変性を持たせます。通りに面して舞台の一部を開放できるようにし、近接する木工室や合唱室と連携しながらさまざまなつくりこみができるだけでなく、客席まで舞台化するなど実験的なパフォーマンスのあり方をサポートします。

開放的なキャンパスのためのセキュリティデザイン

新機構軸＝24時間開放エリアを可能にする計画

- ・多様で自由な活動をサポートするため、昼間は室単位のセキュリティを基本とし、夜間は地域に開く施設を配置するエリアマネジメント・リサーチ軸（高瀬川沿い）のみ開放としながら、そのほかはゲートで各街区の夜のセキュリティラインを形成します。さらに各棟の夜間出入口は1箇所に絞り込みます。
- ・セキュリティレベル4が求められる収蔵庫は図書館・資料館に入れ子状に配置します。

- ・安全性が求められる共通工房は、ガラスなどを利用して視覚的につながりつつ物理的な隔たりをつくる箇所を設けます。セキュリティレベル4が求められる工房は研究室などを通してアクセスする配置とします。
- ・学生証＝ICカードを活用し、学生の自由な出入りとセキュリティを両立させます。
- ・地域に開かれつつ安全な学校を実現するために、地域と連携しながら大学・周辺エリアのパトロールを行う仕組みをつくりま

環境と芸術をつなぐランドスケープデザイン —

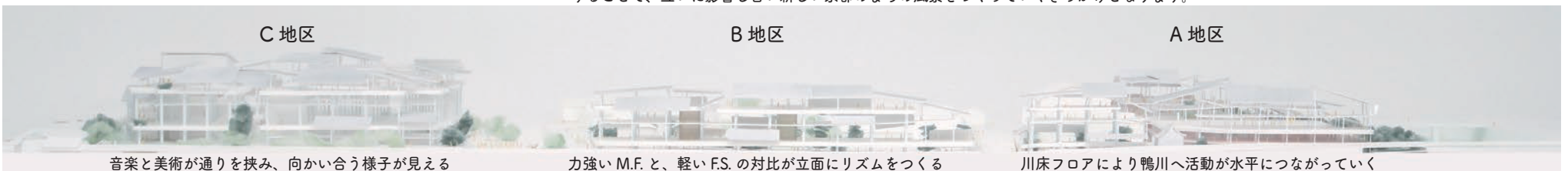
芸術と環境のパサージュ

京都の歴史的作庭に精通したコンサルタントの意見を聞きながら、風景をつくるだけでなく、砂紋の庭のように人の関わりによって美しさが生まれ、人工物・自然物が融合したランドスケープデザインとします。



京都の新しい顔となる新幹線側からの立面

新幹線沿いに京都らしいルーフスケープが展開

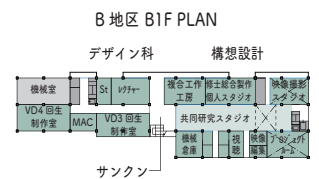


防災対策

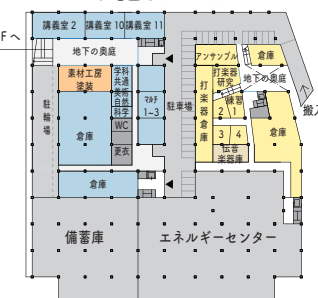
防災拠点としてのキャンパス

免震され浸水被害の少ないC地区地下にエネルギーセンター、備蓄庫を設け、非常時のエネルギーバックアップ、地域防災拠点機能を担います。A、Bは、浸水に備え2階以上に電気室、発電機を設置。太陽光発電パネルを分散設置し蓄電池を置くほか、個別空調方式を併用し常時負荷への分散対応や非常時の各地区の防災機能の向上を図ります。また雨水流出抑制を図ります。

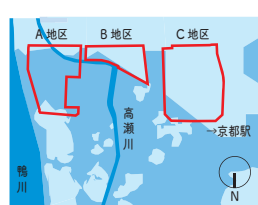
書庫や資料収蔵庫は浸水
予想レベルよりも上のB
地区2階に配置します。



C 地区 B1F PLAN



ハザードマップ



〔凡例〕

■ 浸水 3m 以上 ■ 浸水 0.5m~3m ■ 浸水 0.5m 未満

大学と高校でセキュリティゾーンを明確に分けます。

インフォメーションをパトロールの拠点にもします。

音楽と美術が通りを挟み、向かい合う様子が見える

力強い M.F. と、軽い F.S. の対比が立面にリズムをつくる

川床フロアにより鴨川へ活動が水平につながっていく